

「棄民」の果てに

堀江邦夫『原発ジプシー』増補改訂版によせて

三 筈 利 幸

2011年3月11日の東日本大震災で発生した東京電力福島第一原子力発電所の重大事故は、いまだに収束のめどすらたらず「死の灰」は環境に垂れ流し状態である。この原発震災を受けて、多くの発言や論文あるいは雑誌や書籍が生まれ、また、品切れや絶版状態であった書籍も復刊されている。今般の事故の経過、原発の構造や危険性、放射性物質の問題あるいは国や電力会社の隠蔽体質など、原発にかかわるさまざまな書籍があるなかで、堀江邦夫『原発ジプシー』は原発内部で働く労働者についての貴重なルポルタージュである。みずからその労働者として原発に入り込んで書き上げられた本書は、1979年に現代書館から出版されたものである。その後、1984年には講談社から文庫版が出版されたが、久しく新本で目にするのがなくなっていた。今般の原発震災を受けて、増補改訂版として現代書館から復刊された。ふたたび書店に本書が並ぶ様子を見るきっかけとなったのはほかならぬ原発震災であるというのは、なんともやりきれない思いである。

原発震災と「ヒーロー」

未曾有の大惨事となった東電福島第一原発の事故では、事故発生から数日のうちにメルトダウン、水素爆発が相次いだ。1号機では3月12日に水素爆発が起き、14日には3号機でも水素爆発が起これ、4号機も爆発と火災を起こして建屋が大きく損壊した。15日には2号機の圧力抑制室が損傷したとされ、1号機から4号機に至るまですべて無惨な姿となっていった。

政府は「原子炉はコントロール下に置かれる」「格納容器の健全性は維持されており、大量の放射線物質が飛び散る可能性は低い」を繰り返したが、実際

はそうではなかったことを事故後1ヶ月以上たってやっと政府や東電が認めはじめた。また、使用済み核燃料プールの冷却機能も失われ、原子炉だけでなくこちらも問題となってきた。そこに投入されることになったのは、自衛隊であった。17日にはヘリコプターによって海水を汲み、直接使用済み核燃料プールの上に放水する映像が印象深く報じられたが、これで事態が好転すると思った人はどれほどいただろうか。また、警視庁機動隊の高圧放水車も投入されたが、何の役にもたてなかった。実際、この放水後も放射線量に大きな変化はなかった。翌18日には自衛隊が消防車によって陸上からの放水を行い、日付が変わってすぐの19日、東京消防庁ハイパーレスキュー隊が本格的な放水を行った。このハイパーレスキュー隊の決死の放水作業については、その後行われた記者会見で「日本の救世主になってください」と書き送った妻のメールを隊長が紹介し、涙で言葉を詰まらせるシーンが繰り返し流された。

自衛隊や消防の動きが大々的に報道されるより早く、海外メディアでは原発事故に最前線に対応にあたっている従業員をFukushima 50と呼び英雄視した^{*1}。15日の4号機の爆発と火災を受け、東電は、800名程度いたとされる原発従業員——そこには社員も「作業員」も含まれる——のうち、750名程度を避難させた。しかしそれでもなお約50名が現場にとどまり作業を続けた。彼らを海外メディアはFukushima 50と呼び賞賛したのである。

このように日本でも海外でも、原発事故にみずからの命も投げだし必死に対応する人びとをヒーローとして報じた。もちろん、事故の最前線に対応にあたった彼らは賞賛されなければならないだろう。しかし、忘れてならないのは、彼らは「被曝者」であることだ。

ずさんな被曝管理がいまごろになって次々と指摘されている。すでに4月の段階で東電社員(女性)が内部被曝をしたことがあきらかになって、そのずさんさが問題化した。また、6月になると、250ミリシーベルトという緊急時の被曝線量限度を超えた東電社員が2名いると報じられた。その後、その数は8名となり、うち被曝量の最も多い社員は限度量を3倍近く超えていることもあきらかになった(6月15日現在)。さらに驚くべきことに、まだこの被曝量調査は

対象者全員に行われているわけではなく、線量計をもたずに作業にあたることもあったとも報じられており、実際の被曝量は東電が発表する以上に多く、また、被曝した従業員も多いことは確実である。

この被曝限度を超えたことがまず最初に分かったのは、「東電社員」である。多量の放射線を浴びた彼／彼女の今後の案じられるが、しかし、多量の放射線を浴びた「東電社員」がいることは問題として報じられても、同じくこれまで多量の放射線を浴びながら「闇」に葬られてきた人びとがいることはほとんど報道されない。それも、今回の事故によってはじめて多量の放射線を浴びたのではなく、1966年に日本で商業炉が稼働し始めて以来今日に至るまでずっと、静かにしかし着実に放射線を浴び続け人知れずその存在が消されていった人びとがいる。それは「東電社員」ではなく、体よく言えば「協力会社」の従業員——協力会社の「社員」ですらない——、もっと露骨に言えば、下請け業者、その下請けをする孫請け、曾孫請けの作業員たちである。

彼らの存在に光を当てようとした堀江は、1978年9月から翌1979年4月まで美浜、福島第一、敦賀の各原子力発電所でみずから作業員として原発の内部に入った。その堀江は1979年初版当時の「あとがき」で次のように述べていた。

近代科学・技術の最先端をいくといわれている原発だが、そうはいっても実際に原発を動かしているのは人間なのだ。それも、中央制御室で計器類を監視し、スイッチを押す電力会社社員は、そのほんの一部であって、人数面からも仕事量からも、下請け労働者の方が圧倒的に多い。つまり原発は、下請け労働者の存在があってはじめて原発として稼動することが可能なのである。言いかえれば、現場の最前線に送りこまれ、放射能にまみれて働くことを強いられている労働者たちの姿を無視して原発を語ることはできない、ということなのだ。(315)

本書で書かれているのは、すでに30年以上前の堀江の体験である。本書の内容がそのまいま現在の原発の様子だといえ、電力会社や関係者は血相を変

えて否定するだろう。もちろん、原発での作業や被曝管理などが以前よりも「進歩」しているところはあるだろう。しかし、原発はこうした労働者がいなければ動かないのは紛れもない事実である。ちなみに、電気事業連合会の「でんきの情報広場」というホームページを見てみると、事故を起こした福島第一原子力発電所について、「発電所で働く人たち」として「407社・6778人が働いています」と書かれている*²。東京電力福島第一原子力発電所に、407社もの会社がかかわっているということは、下請け、孫請けといった構造は現在もお厳然として存在していることの証左である。それは「東京電力職員」が計1087名であるのに対して、「協力企業職員」が5691人であることから明瞭に分かる。

「クリーン」な原発を支える労働者

堀江が最初に働くことになったのは美浜原発であった(13-132)。まずはタービン建屋など二次系と呼ばれる箇所での作業をすることになった堀江は、その過酷さをいきなり体験する。「ネッコー」と呼ばれる作業は、「ウエス」という「ボロ布」(32)をマスク代わりにして「高圧給水加熱器」の中に入りピン・ホールの有無を調べるというものである。エアを入れることでピン・ホールの有無を確認するこの作業には、大量の粉塵が出る。「キラキラ光る金属破片が浮遊」(34)するなかでの労働は、放射能の危険とはまた別の危険さわまりない環境における作業が原発内で行われていることを如実に示す。重労働であり確実に呼吸器系を冒すであろう作業を数週間体験した堀江は、次にはいよいよ一次系と呼ばれる「管理区域内作業」を行うことになる。

「防護服を着るのは、今日が生まれて初めて」(104)の堀江は防護服の着方もわからないし、マスクも「どのようにやっても空気が漏れてしまう」(104)。

「放射能から肉体を守ってくれる防護服やマスクを自己流に着込む……。放射能に冒される不安とともに。こんな「でたらめ」を通用させている「放射線管理」に強い怒りを覚えた。(104-5)

このずさんな「放射線管理」の下、堀江は美浜原発2号機の「使用済み燃料ピット除去工事／付属品除染・片付け」という作業に入った(103)。ここにいう除染とは、人の手でタオルを使って放射性物質を拭き取る作業のことである。最先端の技術で動かされているはずの原発には、ローテクと呼ぶことすらできない手作業が必要とされている。そして、この手作業を行うにもかかわらず、放射線管理は至ってずさんである実態を堀江は書いている。

1978年12月、美浜原発3号機の定検が終わりかけ作業発注が減少するなか、堀江は美浜原発から福島第一原発に移ることを決心した。そう、この大震災で事故を起こしたあの福島第一原子力発電所である(134-239)。いよいよ深く原発の労働にかかわることになった堀江の伝える状況は、短い書評のなかではとても紹介しきれないほどの内容と広がりを持っている。ここでは、あえてそのなかで2点だけに絞って考えたい。

堀江は、福島に来てはじめて同僚からマスクの付け方を教えてもらったというエピソードがでてくる(162-4)。どこの原発であれ、放射線管理はずさんなままであり、アラーム・メーターが鳴ってもなおそのまま作業を続行する——続行せざるを得ない——作業員の様子(193-4)や、次々と放射線のアラーム・メーターが「パンク」するほどの高線量エリアで働きながら、しかし、作業後に線量を報告する際には過小に届けるという実態(224-5)が克明に描かれる。また、放管教育がなされるとはいてもそれはアリバイ作りのための名ばかりの教育であって、その熱気と息苦しさからマスクなどは「首にぶら下げている」作業員が多く見受けられ、堀江も「ついつい彼らの仲間入りをすることが多くなってしまった」(186)という。今般の事故に際しても、「直ちに健康に影響はない」という常套句が政府から出されたが、たしかに放射線はいきなり死に至るほどの線量を浴びないかぎり「直ちに」その影響は現れない。しかし、高い線量の放射線を浴び続けたマスクをしないことによる内部被曝を受け続けている労働者たちの体は、着実にむしばまれていく。今回の事故において被曝限度量を超える作業員がいることがあきらかになったが、それは何も今回の「事故」に限ったことではない。これまで「安全」に運転していた原発でも限

度量を超えて被曝した無数の労働者がいるのである。

堀江は福島原発での作業中に蓋の開いていたマンホールから転落し、肋骨を折るという重症を負った。そもそも堀江はこの事故に遭う前に、原発作業員が倒れても救急車は呼ばないという話を聞いていた(173-4)。「安全」なはずの原発に救急車がやってくることは許されないということである。2002年にはまさにこの福島原発のトラブル隠しが明るみに出たが、そうした隠蔽体質は労働者の緊急事態に救急車すら呼ばないというところにまで浸透していることがまざまざと分かる。そうした話を聞き知っていた堀江本人が、今度は事故に遭ってしまった。すると今度は、堀江に対して治療費はすべて面倒を見るから「労災扱い」にしないように要請があったという(203)。下請け業者のなかから「事故」が発生したとなると「東電に迷惑をかけることになる」(204)。もちろんこれは、東電に迷惑をかけるのではなく、東電から下請けをはずされることへの恐怖から、下請け企業に奇妙な忠誠心が生み出されていることの現れである。下請けからすべてひっくるめて隠蔽体質が浸透している。

このようにして「労災」とその「被害者」は、法の適用を受けることなく、闇から闇へと葬られてしまうのだ。／「無災害一五〇万時間達成記念」。こう記された木製の塔が、福島原発構内の道路際に誇らしげにたっている。東電のいう「無災害」とは、災害が発生しなかったことではなく、災害が公にならずに済んだこと——ではないのだろうか。(207)

堀江は前々からの考えもあり、また「仲間」からの誘いもあって福島第一原発を去り、敦賀原発に向かうこととなった(241-311)。美浜、福島第一とその過酷さを増す原発労働に従事してきた堀江は、最後に「悪名高き」敦賀原発の「原子炉の真下で」働くこととなった。

堀江は、日々の作業について書いた後、最後にその日の「被ばく線量」を記録している。ただ数字が書かれるだけなのだが、だからこそ逆に背筋が凍る思いがする。「被ばく線量」＝四五ミリレム」「被ばく線量」＝六五ミリレム」

「被ばく線量」＝八〇ミリレム」。1ミリレムは、現在使われるシーベルトに直せば10マイクロシーベルトである。堀江が淡々と記録した被曝線量は、一般の人が1年間に自然に被曝する被曝線量をほんの数日で軽く超えるものであった。原子炉の真下で作業を行うようになった堀江の被曝線量は、それまでの作業時とは比べものにならない。緊迫した作業の様子が伝わってくる。高線量のため長時間の作業はできず、短時間で作業員が入れ替わっていくという「人海戦術」となる。どこかで同じような作業の様子があったことに思い至る読者は多いだろう。原発労働者にとっては、今般の事故で行われていることが日常なのである。

「原発ジプシー」はいま

「原発作業知らせず求人」——これは2011年5月9日の『朝日新聞』夕刊に掲載された記事の見出しである。この事件は他紙でも報じられ、全国放送のニュースでも流れた。記事によれば、釜ヶ先で60歳代の男性労働者が、宮城県女川町でのダンプカー運転手として採用されたにもかかわらず、東京電力福島第一原子力発電所の敷地内で原子炉冷却のための水をタンクから給水車に移す作業などをさせられたという。釜ヶ先や山谷の労働者たちが、劣悪な労働環境のなか酷使され、危険な労働を強いられ、「使い捨て」られてきた「棄民」の歴史はここであらためて指摘するまでもない。未曾有の大惨事となった福島第一原発事故にさいして、釜ヶ先の労働者がその危険性を知られることなく原発の作業に従事させられ、このように報道にのらないかぎり、彼らはまた使い捨てられていく。

本書を読むと、原発労働者が「棄民」として扱われていることが克明に分かってくる。堀江の「同僚」である「橋本さん」も釜ヶ先の労働者であり、また、本書には釜ヶ先の労働者が随所に登場する^{*3}。ただし、本書に書かれるのは1978年から1979年の様子であり、実は現在では事情が少し変わっている。いや、正確に言えば事情が変わる様子が本書に書かれているのである。

「日立などにエタイの知れん労働者がたくさんおったため、最近になって東電がそれを問題にしはじめた。住民票のない者は、原発で働かせんと言いつ出したんよ。去年来たときは、なんも言わなかったのに……」／結局、矢野さんは、詰所で四日間待機しただけで、なんの仕事もせずに、帰されてしまうのだ。／「わしを利用するだけ利用してしまうと……」／今さらグチをこぼしても、とでも思ったのか、彼はあとの言葉を濁してしまった。(177-8)

ここから、1970年代までの原発労働の様子が垣間見られる。70年代も終わりにさしかかった頃、ようやく東電が住民票のない労働者がいることを問題視し排除しはじめたということは、逆に言えばこの時期までは釜ヶ先や山谷をはじめとした住民票を持たない日雇い労働者が数多く原発の作業労働にかかわっていたということである。彼らについての記録は、東電をはじめとした電力会社や原発関連会社にはほとんど残っていないだろう。残す必要もないと考えられただろうことは想像に難くない。しかし、現在では「各原発では釜ヶ先などの日雇い労働者をほとんど雇わなくなってきた」という実態がある。

なお、「原発ジブシー」ということばに関連して、ひとつだけ付け加えておくと、最近では、私の知るかぎり、各原発では釜ヶ崎などの日雇い労働者をほとんど雇わなくなってきた。身元の不確かな者たちが原発で大勢働いている、という話がひろまっていたことへの電力会社の対策の一環ともいわれ、最近では原発周辺地域住民のなかから労働者を募集することが増えている。このことからすると、各地の原発を渡り歩く日雇い労働者のその存在はもとより、「原発ジブシー」ということば自体、やがて近い将来消え去ってしまうのかもしれない。ならばなおのこと、一九七〇～八〇年代という時代のなかで懸命に生き働き続けてきた「原発ジブシー」たちのその存在を、あるがままにきちんと記録しておく必要がある、と私は思ったのだが。(346-7)

堀江は「原発ジプシー」の存在だけでなく、そのことば自体もなくなっていき、原発労働の現実が忘れられ見えなくなっていくことを危惧している。この堀江の危惧からさらに敷衍して考えれば、問題はそれにとどまらない。「原発ジプシー」ということばが消えていく先には、原発による「棄民」がよりいっそう隠蔽されていく危険性が垣間見えるのである。

「原発ジプシー」が顕在的な存在ではなくなったことは、その労働力がもっと別のところに求められるようになったことを示している。先ほども参照した電気事業連合会のホームページに掲載されている、労働者の数を見てみたい。大事故を起こした福島第一原発で2010年7月現在働く人数は、合計6778人という。内訳は福島県内から6151人、その他は627人となっている。要するに原発で働く人びとの約9割は、「地元」からやってきている^{*4}。なるほど、堀江が危惧するように「原発ジプシー」なる存在はおろかそのことばすら忘れ去られそうなくらいの「地元密着」となっている。これを原発が雇用を創出しているとみるのは、あまりに虫のいい話である。なるほど原発を動かす以上労働者が必要となる。その労働者を「原発ジプシー」ではなく「地元」から調達することになったいま、原発とその地元とは骨がらみの状態になっていく。原発労働者、電力会社と下請け、孫請け会社、原発労働者やその家族をみこんだ各種の商業など、原発関連の経済、産業構造が「原発ジプシー」を排除していくことで今度は逆にかっちりと「地元」に確立していく。どれほど放射能の危険を感じようとも、原発を否定することはみずからの仕事を否定するだけでなく、「地元」全体、生活全体を否定することになる。

現在54基の商業炉が存在する日本列島をみると、福島第一原発に1号機から6号機があるように、原発は単独で存在するのではなく、ほぼすべてにおいて複数基が林立している様子がみてとれる。この原発が林立する姿を、堀江の11月30日のルポが次のように説明してくれる。

十一月三〇日（木） 今日も雨。作業は、きのうと同様、三号機の「洗濯」作業。

休憩室で、田口さんという初老（六二、三歳だろう）の労働者が、みんなに不満をもらしていた。どうやら不満の原因は、今日の朝、事務所内で行なわれた朝礼（といっても「安全標語」の唱和のみ）のあと、田口さんから六、七人が事務所責任者の梅元さんから呼ばれたことにあるらしかった。

田口さんたち（いずれも六〇～七〇歳台）は、そこで「三号機の定検もほぼ終わった。来年二月ごろまで仕事なくなるので、休んでほしい」と言われたという。いわゆる"休職勧告"だ。

「いくらわしらが歳だゆうても、みなと同じように仕事をやってんのに……。それでなくてもだよ、やれ定検が始まるってころには、会社のもんが一升ビンかかえて、わしらを仕事に引っ張り出すくせに……。それが、いざ定検が終わっちゃうと、とたんにこれだからなあ……」

田口さんは、右手で首を切る仕草をして見せた。

それを聞いていた一人の労働者が、田口さんを慰めるような口調で、こう言った。

「そうだなあ、あんたの言う通りだよ。せめて美浜にもう一つ原発がありゃあ、切れ間なく定検があるのになあ……。なんたって、ここは不安定な職場だよ」

原発労働者が——といっても美浜原発の場合、その大半は地元の農漁民だが——原発の「安全性」とか「エネルギー危機」といったものとはまったく無関係に、原発建設に「賛成」してしまう（しなければならない）背景の一端を、彼らの会話のなかに見る思いがした。（129-130）

原発の林立する姿は、そのまま原発が「地元」にがっちりと組み込まれていった経過を示している。過疎地を狙い撃ちするように原発が建てられ、一度動き始めた原発は「地元」を絡め取っていく。いったんつくられた原発を起点とするカネの流れは、今度はこの流れが途絶えることの恐怖を「地元」に知らしめる。原発労働に加わった者は、すでに「原発ジブシー」となる選択肢を奪われている。ならば、「地元」にいて次なる仕事がやってくることを待ち望まざる

を得ない。堀江の危惧するとおり、「原発ジプシー」なる存在も、そのことはさえも消えてしまいそうな現在だが、実際のところはこの「原発ジプシー」は「地元」で再生産されている。「地元」が「棄民」化されているのである。「ジプシー」のように各地を転々とするとはなくなっても、1号機から2号機そして3号機へと「地元」にしながら「原発ジプシー」は確実に存在している。その意味でも、本書を過去の原因にかんするルポだと評することは、見当違いであろう。「原発ジプシー」がまさに目に見えるかたちで存在した歴史を知ることが、それが見えなくなった——決してなくなったのではない——現在の原発労働と「棄民」の問題を考える上にきわめて重要なのである。

堀江のうったえるように、「クリーン」な原子力発電所は、「原発ジプシー」という労働者の、過酷という表現ではあまりに軽すぎる、命を削る労働に支えられてはじめて稼働している。それは本書が30年前に出されたという「古さ」とは無関係である。最後は人間のまさにこの手でしか原発を制御しきれないのは、福島第一原発事故発生後すでに3ヶ月を過ぎたいまでも事故の収束のめどすら立たない状況をみればあきらかである。しかし、この大事故をもってしてなお、政府は原発を手放そうとはしない。首相である菅直人は原発の安全基準を見直すと言ったが、どんな基準を作れば「安全」といえるのか、そもそも「安全」などありえないことは今般の大震災によって十分すぎるくらい証明されたはずである。さらにいえば、安全基準を最高度に厳格にし、あらゆる災害を想定したとして——それは不可能なのだが——、原発は「原発ジプシー」たちが請け負った命を投げ捨てるような労働がなければ稼働しない。「安全」「安心」をどれほど連呼したところで、「棄民」なしでは原発は動かないのである。「棄民」の果てに何が現実となったのか。すでにわれわれは知っているはずである。「棄民」を隠し続け、その存在を隠蔽し続けてきた果てに、日本を、いや地球全体を「棄民」化しかねない深刻な事態を招いた。

【追記】

この書評を閉じたはずのいま、書き足さねばならないことが出てきた。6月

18日、海江田万里経済産業大臣は「各原発でのシビアアクシデント対策が適切にとられている」として、原発の再稼働を地元自治体に要請する考えを示した。「棄民」は終わらない。

注

- * 1 たとえば『ニューヨークタイムズ』 3月15日（電子版）<http://www.nytimes.com/2011/03/16/world/asia/16workers.html>など。
- * 2 2010年7月現在の数。http://www.tepco.co.jp/nu/f1-np/data_lib/pdfdata/bk909-j.pdf参照。
- * 3 たとえば、次のようにある。美浜で働く「同僚」と話し込んだときのエピソードである。

大阪の“釜”から十数人の仲間とここに働きに来ている、賃金は、“食い抜き”（食事代は別）で五〇〇円。宿泊代と三食のメシ代は会社負担となっている——といったことを、彼は雑談のなかでいった。原発の定検時には、人手不足を解消するため、大阪の日雇い労働者の町「釜ヶ崎」からも労働者が“かり集め”られているというウワサは、やはり事実だった。

彼は別れぎわに、「定検が終わったら、わしらも用なしだよ。その後？ うん、神戸にちょっとした仕事があるんで、そっちへ行ってみようと思う。よかったらあんたも来ないか。親方——じゃなかった、社長に話してやってもいいよ」と、笑った。(62)

さらに堀江は、黒人への差別についても触れている。堀江が福島第一原発にいたとき、「「黒人労働者」の異常な仕事ぶりが話題にのぼった」(222)という。本稿では直接触れることができないため、多少長いが引用しよう。

七七年一二月、福島一号機で給水ノズルと制御棒駆動水戻りノズルにヒビ割れ発見。この時期に、GE社のアメリカ人延べ一八人、黒人労働者も延べ六〇人が動員されている（七八年二月県議会で松平勇雄県知事の答弁）。彼が「また、やって来た」と言ったのは、このときのことが頭にあったからだろう。

黒人労働者は、福島原発だけでなく、敦賀原発でも働いている。六七年から六九年にかけて約一五〇人、七七年四月から五月に約六〇人——七八年十一月、

衆議院予算委員会で草野威議員が明らかにした数字だ。これらの黒人労働者は、いずれも高汚染エリアで劣悪な労働をしているという話を私は耳にしていた。この疑問を「また、来たのか」と言った男にぶつけてみた。

「わしは少し前まで、東芝の下請けの『××工業』という会社で働いていた。そこでのおもな仕事は炉心部で、制御棒の調整や点検。線量が高いんで、働いてる時間は、一日に一〇分から一五分。それでも一〇〇（ミリレム）ちかく浴びるんよ」

その彼の働いていた会社に、黒人労働者が「ちょくちょく顔を出した」という。

「わしらでさえアラーム・メーターは、五〇（ミリレム）とか、せいぜい八〇（ミリレム）を持って入るんだけど、黒人たちは二〇〇（ミリレム）を持って入るのよ。それで、一日に、そうだなあ……、だいたい七〇〇ミリレムは浴びとったな。一〇〇や二〇〇は目じゃねえ、へえっちゃらなんだよ。これには、わしらもビックリしたよ。給料？ 仲間の一人がそれを聞いたことがあって、ちょっといま記憶にないんだけど、べらぼうに高いことは覚えとる。なんでも、どれだけの線量浴びたらいくらという計算らしかった。それから、やつらは、三日、四日働くと、すぐいなくなっちゃうのよ。すぐに新しいのが交替で来たけど……。会社の人間の話だと、やつらはスラム街でウロウロしてんのか、刑務所に入ってた者だって言ってたなあ」

そして彼は、黒人労働者のなかには、ロクに英語も話せない者がいた、腕や胸にイレズミをしている者が多かった、と付け加えた。原発の引きずる"暗い影"。その一端を「黒人労働者」の話に見る思いだった。(222-224)

- * 4 このなかには、住民票を福島に移してはいるものの、実態は「原発ジブシー」のように各原発を転々としている労働者が含まれている。逆に、実際のところは福島で生活しても、住民票を福島に移していない者は含まれていない。この数字をもってイコール「地元」というわけではないが、こうした存在を差し引いても圧倒的多数が「地元」の原発で働いていることは間違いない。